

# 上ノ平遺跡31号住居跡出土土器の再検討

山 口 逸 弘

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

- 1. 出土土器の観察
- 2. 出土状態の確認
- 3. 類例の検討

4-1. 「焼町類型」について

- 4-2. 波状口縁深鉢について
- 4-3. 台付き深鉢について
- まとめ

## — 要 旨 —

本分析は、既報告の『上ノ平I遺跡』に所収された31号住居跡出土土器の再検討である。上ノ平I遺跡は吾妻郡長野原町川原畑に所在する遺跡で、八ッ場ダム調査関連で、2007年～2008年に発掘調査が行われ、2008年に報告書が刊行されている。31号住居跡出土土器は中期中葉末に比定され、一遺構における異系統共存の様相を具体化する資料である。本稿は報告書で触れ得なかった、31号住居跡出土土器が提起する研究視点として、「焼町類型」・波状口縁深鉢・台付き深鉢に注目し、住居内に残された型式組成と器種組成の在り方を問い合わせ、31号住居跡出土土器の位置付けを把握するための、基礎的な作業である。今回は、31号住居跡出土土器の類例を浅間山周辺と赤城山南麓域に求め、住居跡出土という共伴の実態を把握し、出土土器群が富士見村旭久保C遺跡6号土坑と渋川市道訓前遺跡JP-9壙出土土器に近い時期と土器組成を示す様相を考えてみた。出土土器の様相から、中期中葉末である加曽利E I式古段階に比定され、「焼町類型」に組成比重のかかる様相、さらに波状口縁深鉢と台付き深鉢という特徴的器種の加わる器種組成を提示した。

## キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 群馬県

研究対象 縄文時代中期土器群

## はじめに

上ノ平I遺跡は、吾妻川左岸の長野原町川原畠に所在する遺跡である。調査区地内の標高は600m前後で、現吾妻川河床からの比高差は約110mを測るよう、急激な南斜面の途中に形成された緩斜面地形に占地する遺跡である。段丘面としては、吾妻川左岸最上位段丘にあたるが、北側に迫る山地地形とほぼ一体化した周辺地形である。周辺遺跡では、上位段丘に三平I・II遺跡や下位段丘に石畠岩陰遺跡などが知られる<sup>1)</sup>。

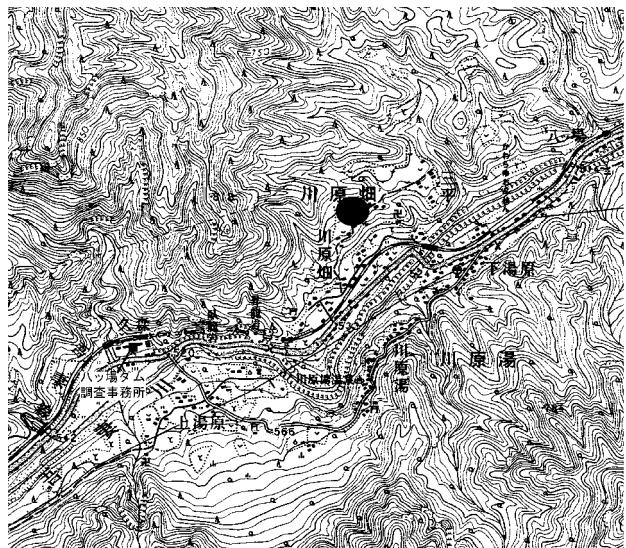
発掘調査は八ッ場ダム建設に関連し、平成18年度と19年度にわたり発掘調査が行われた。19年度に整理報告作業が平行したが、2年次にわたる調査のため、19年度に行われた整理作業は18年度調査に相当する遺構・遺物を対象としている。19年度調査の整理・報告は後の作業となるが、将来的に遺跡全体の発掘調査が行われる可能性もあるため、今後も本遺跡の資料は増加・充実するものと期待される。

既に、報告書も19年度に刊行され(瀧川他2008)、縄文時代集落跡として、住居跡10軒、埋設土器3基、土壙10数基を中心に平安時代集落跡や陥穴状土坑、中・近世墓壙などが所収されている。このうち、縄文時代の住居跡は、中期中葉末に比定される例が9軒、後期初頭の敷石住居跡1軒が報告されている。いずれも、良好な資料が検出されており、吾妻川流域における屈指の縄文遺跡となることは自明であろう。また、19年度の発掘調査でも、中期中葉末の住居跡や後期中葉の敷石住居跡が調査されている。

本稿で扱う31号住居跡出土土器も、縄文時代中期中葉末の良好な資料である。報告書作成の際に、編集者の瀧川伸男氏より、筆者へ執筆依頼がありながら、筆者自身の怠慢のため、成稿には至らなかった。反省を踏まえ、ここに補足説明を加えて若干ながらの考察を試みてみたい。

もちろん、出土土器の提起する問題は本稿に指摘する項目以外にも多い。また、先にも述べたように整理・報告作業は一部に止まり、さらに発掘調査も遺跡全域には及んではいない。将来的に遺跡の様相がより明らかになった時点で、より詳細な考察を加えるべきであろう。よって、本稿は上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器が提起する諸問題の一例を紹介することになる。途中報告という形態で大変恐縮ではあるが、まとめた報告が刊行される際に、あらためて出土土器と遺跡の関係などを明らかにするべきであろう。

尚、本稿の記述も報告書の詳細なデータを踏まえて進めるが、表現の違いや視点の差が生じている。詳細な記述・データは報告書に譲りたい。



国土地理院地形図（2万5千分の1「長野原」使用）

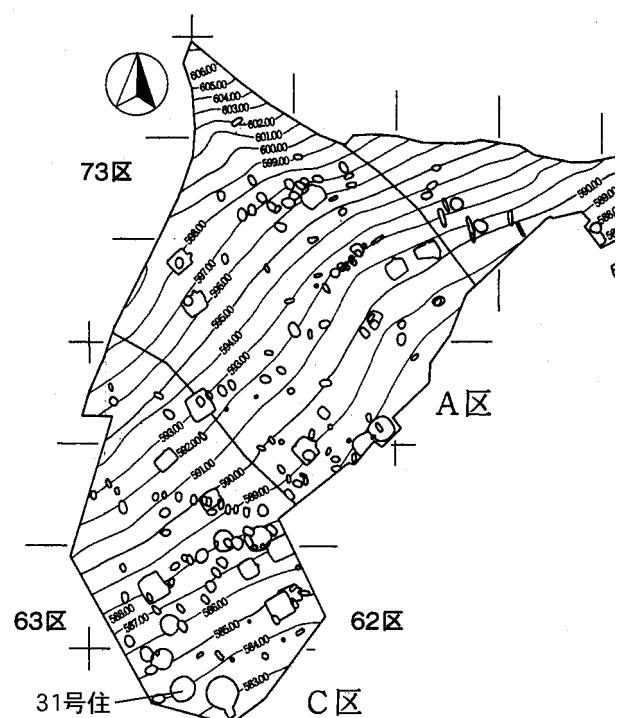


図1 上ノ平遺跡位置図・全体図

## 1. 出土土器の観察（図2～図6）

上ノ平I遺跡31号住居跡は調査区南端で確認された竪穴住居跡である。周辺には後期に比定される28号住居跡や中期中葉末の24号住居跡が近接するが、重複遺構はなく単独の検出となっている。約5.0×4.1m程の円形を平面形とし、傾斜のため南壁遺存度は不良ながら、北壁高は70cmを超える深さを誇る。地床炉で、柱穴3基を見ることができる。

出土土器は、埋土中より多量に出土している。床面に

密着する個体は見られないが、おそらく、北側からの一括廃棄に近い出土状況と捉えられよう。報告書では、93点もの土器資料が掲載され、その全てが中期中葉末に比定される資料である。そのうち完形・復元実測された個体は34個体を数え、極めて豊富な出土量を示している。本節では、この復元実測された個体を中心に取り上げ、31号住居跡出土土器の概要を把握したい。掲載にあたっては、全ての個体を1/4掲載とし、必要に応じ正面観を重視した図も併せた。

以下、主な出土土器の概要を述べるが、本稿レイアウトの都合上、報告書番号とは違う番号を付している。ご容赦願いたい。

**出土土器1**（報告書番号1）：本稿では「焼町類型」（山口1997など）と称するが、「焼町土器」（野村1984）、「焼町式新段階」（寺内1997など）と呼ばれている土器群である。外面を環状突起の集合によって構成される口縁部突起を四単位付す。おそらく正四単位と把握されるが、一単位のみの残存である。環状突起相互が斜位に付せら

れており、「焼町類型」によく見られる口縁部環状突起の特徴を具体化している。また、環状突起はやや小型であり、あるいは口縁部突起装飾の退化化とみることもできよう。口縁部～体部は一帯構成といえよう。突起直下の体部中位に三連の橋状把手を設け、下端に半渦巻き状意匠を配す懸垂文構成である。隆線側線は内皮平行沈線を主とし、空白部を三叉文や円形印刻文を埋める。胎土・焼成から、やや軟質な印象を得るが、高さ50cmを超える大型深鉢である。

**出土土器2**（報告書番号3）：口縁部は内湾し、大型の四単位波状口縁を呈する。体部上半で緩やかな湾曲を持たせる。波頂部は小型の環状突起2連によって飾られ、頂部より鰐状の隆線が垂下し、口縁部文様帯を画す。口縁部文様帯は橢円状区画文構成を示す。体部も比較的単純な区画文構成で、上半が大型の三角形区画を基調とし、下半の橢円区画文を配し、体部横帯文構成と見ることができよう。区画充填手法は口縁部は縦位沈線、体部上半は横位沈線、下半橢円区画内は側線沈線と横位沈線が埋

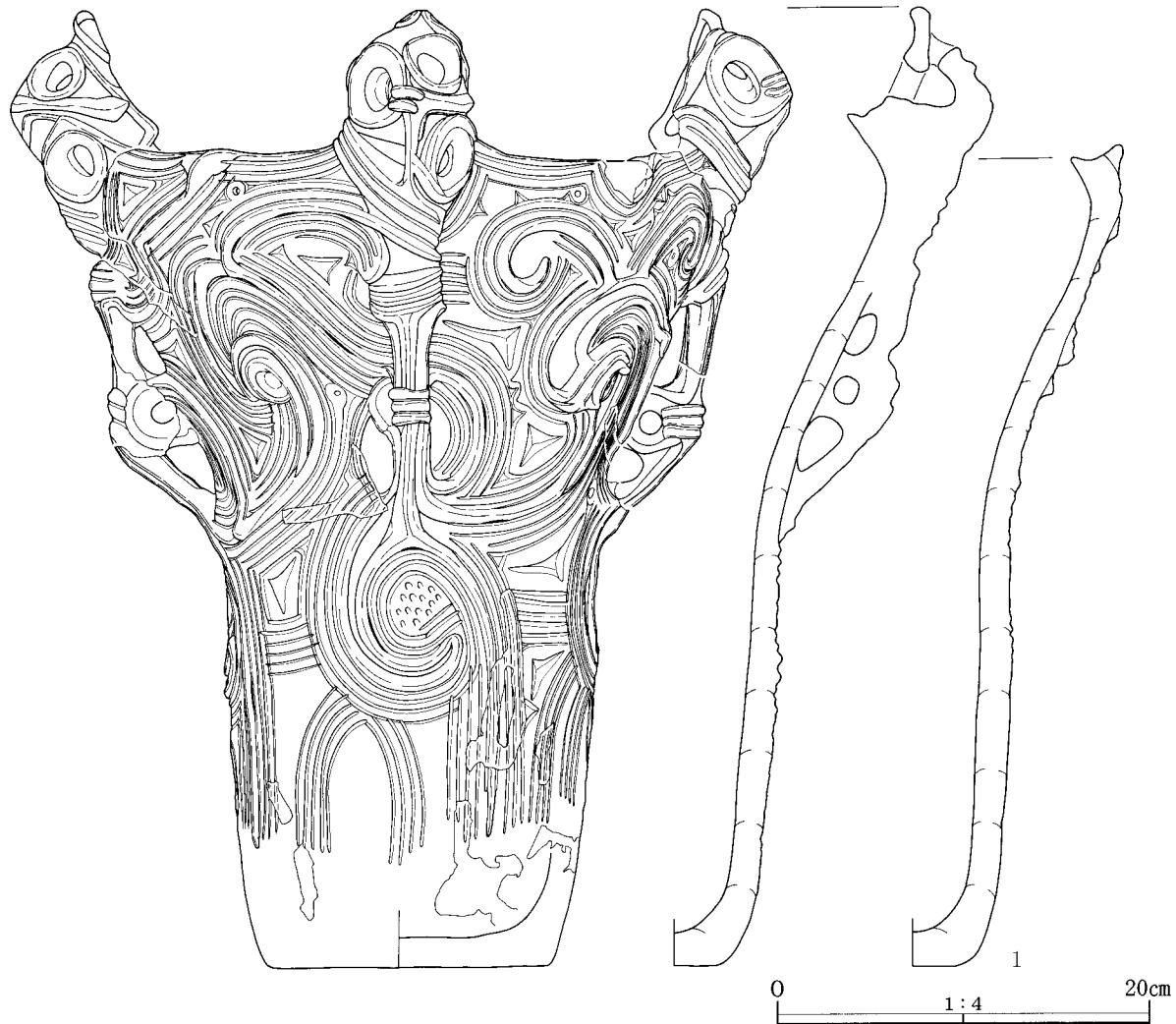


図2 上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器(1)

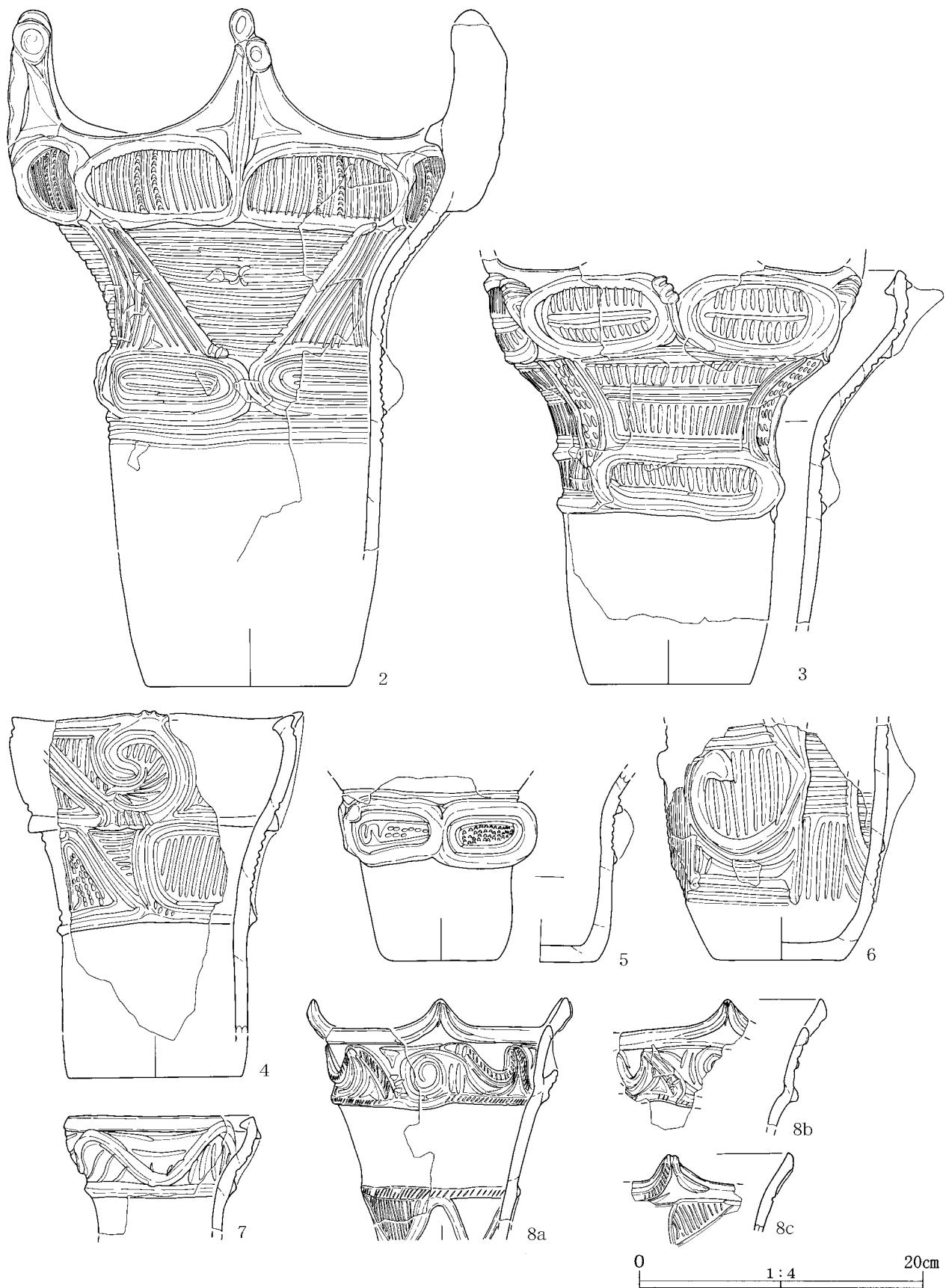


図3 上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器(2)

められる。類例は少ないが、「焼町類型」との関連も想起されよう。

**出土土器3**（報告書番号4）：四単位を数える波状口縁深鉢。波状形態は2に比して緩やかである。約1/2の残存だが、波頂部・底部を欠損する。口縁部文様帶は波頂部下を逸するが、橢円状区画文構成であろう。区画内中位には横位沈線を2条施し上下を縦位短沈線で充填する。この充填手法は体部上半の大型方形区画文にも充てられ、口縁部と体部上半の区画文構成が近似した印象となっている。また体部上半の区画文には、列点状刺突文を充填した方形・縦位橢円状区画文が大区画文間を繋ぐ形態で配されている。体部下半は橢円状区画文を四単位配するが、充填文は縦位短沈線が充てられている「勝坂系」<sup>2)</sup>・「焼町類型」であろうか。

**出土土器4**（報告書番号9）：内湾する口縁部を持つキャリパー状の平縁深鉢。ただ、波底部のみの残存も可能性があり、注意を要する「焼町類型」と考えたが典型例ではないようだ。口縁部～体部下半約1/3残存。口縁部に隆線による渦巻文、体部上半に橢円状と三角形の区画文を配す。区画文を配した横帶文構成といえよう。体部下半は広く無文である。隆線側線は1本描き沈線で、短沈線や縦位刺突文が区画内を充填する。

**出土土器5**（報告書番号11）：体部上半部が強く開き、橢円区画文を配する。体部～底部の残存である。体部横帶文構成といえよう。区画接点は強く突出し突起状となる。隆線側線は沈線で、区画内は縦位刺突文、交互三叉文などを充填する。区画単位は5単位である。橢円区画のみでは「勝坂系」あるいは「焼町類型」かを判断できないが、区画接点の突起状の処理方法など「焼町類型」に近い要素である。

**出土土器6**（報告書番号12）：体部～底部約1/2残存。緩やかな内湾を持たせる体部器形である。垂下隆線中央が突起状となり、隆線による渦巻文が派生する。垂下隆線による懸垂文構成であるが、下端に横位沈線を施す箇所もあり、体部下半の区画意識は働いていたのかも知れない。空白部は横位・縦位内皮平行沈線、三叉文が充填される。「焼町類型」と捉えた。

**出土土器7**（報告書番号10）：小型のキャリパー状深鉢。口縁～頸部破片。横位隆帶で画された口縁部文様帶を横位波状隆帶が付され、三角区画文を配す。区画内は横位沈線や斜位沈線が疎らに充てられる。「勝坂系」か。

**出土土器8**（報告書番号13）：「勝坂系」であろう。口縁部破片2点と口縁～体部約1/2破片からなる。図は四単位を想定したが、あるいは三単位の可能性もある。また、口縁部波状突起を付すが、双波状突起の可能性もある。口縁部文様帶を横位刻み隆線で画し、沈線による渦巻文や、刻みを付す弧状隆線による意匠文が配される。弧状部は中空状の突起となっている。側線は一本描き沈線、

空白部は縦位短沈線や三叉文を充てる。体部上半に幅広の無文部を設け、下半は低隆線による三角区画文構成が配される。

**出土土器9**（報告書番号2）：口縁部が内湾する大型の深鉢である。底部を欠損する。平縁で口縁部に大型の波状突起を付し、頸部と体部下半に横位隆帶を巡らす区画文構成である。口縁部突起は、環状・双環状突起を若干斜位に連接するが、突起のみの加飾で、他は無文である。体部文様帶は隆線による渦巻文や橢円状意匠を配するが、隆線相互が接しておらず、明瞭な区画文とはなっていない。体部の空白部は縦位沈線を充填する。「勝坂系」である。

**出土土器10**（報告書番号5）：台付き深鉢。台部下半を欠損する。欠損部が磨滅するが再利用の痕跡ではないようだ。口縁～体部は強く内湾する。口縁部に双環状突起を二単位付し、下端より隆線が垂下する。突起上端面には沈線による三叉文が施される。突起下端の横位隆線と体部下半の横位隆線で体部文様帶を画す。体部文様帶は上半に半渦巻き状意匠を隆帶で配し、隆帶で連接する。隆帶側線は一本描きの沈線、空白部は三叉文や交互三叉文、列点状刺突文が埋められる。台部孔は四単位を数える。全体的に丁寧な施文といえよう。列点状刺突文など、「焼町類型」の文様要素にも近いが、「勝坂系」と考えた。

**出土土器11**（報告書番号28）：「三原田類型」<sup>3)</sup>と考えたが、口頸部の装飾方法など大木8a式や8b式との関連も見ておきたい。口縁部～体部上半約1/2欠損。底部欠損。体部中位に膨らみを持たせ、口縁部隆線装飾が集中する極めて不安定な器形である。口縁部突起下に中空状の大型突起を付す。突起には刻み、沈線による渦巻文、短沈線などが施される。頸部隆線は強く突出する傾向が見られる。体部上半は沈線による方形状の区画文が配され、下半は横位隆線で画される。地文縄文で縦位・斜位に施される。

**出土土器12**（報告書番号29）：「三原田類型」。口縁部のみ残存。外傾する口唇部は無文で、口縁部内湾部に設けられた横位S字状隆帶と橢円状意匠による中空状装飾を口縁部文様帶とする。おそらく四単位であろう。頸部は無文である。

**出土土器13**（報告書番号31）：波状口縁波頂部を欠損する。意図的な欠損であろうか。口縁部文様帶は押圧を加えた横位鎖状隆帶で画され、立体的な橋状把手を四単位付す。把手は環状突起や沈線により装飾を集中させる。体部は鎖状隆帶が垂下する四単位懸垂文構成で、無節Lが施される。

**出土土器14**（報告書番号33）：キャリパー状の深鉢。口縁部は横位隆線で画され、口縁部文様帶内は弧状隆帶や半渦巻状意匠が配される。弧状隆帶には沈線が重なるが、器面磨滅のため全容は判然としない。体部は縦位RLが

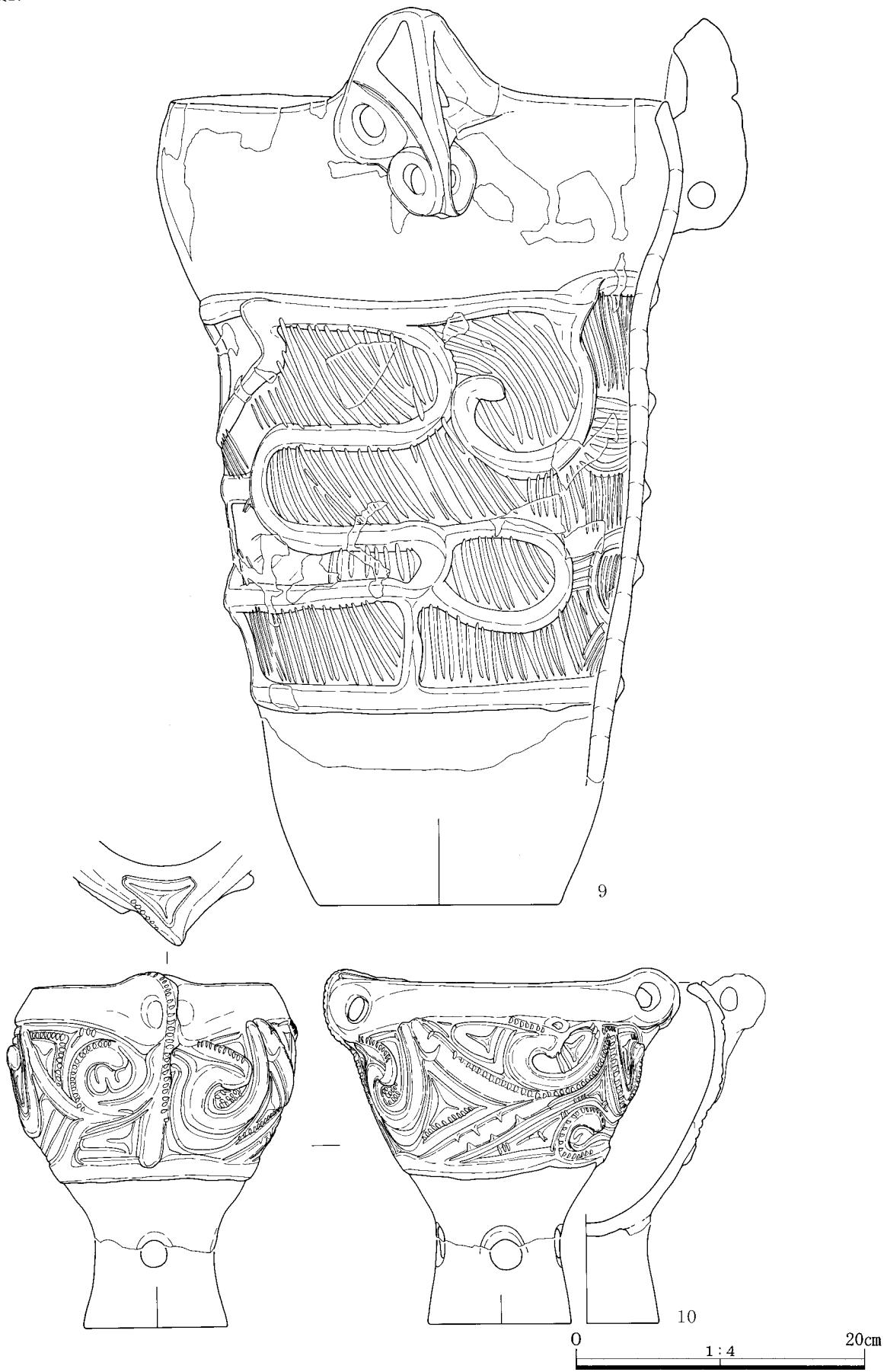


図4 上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器(3)

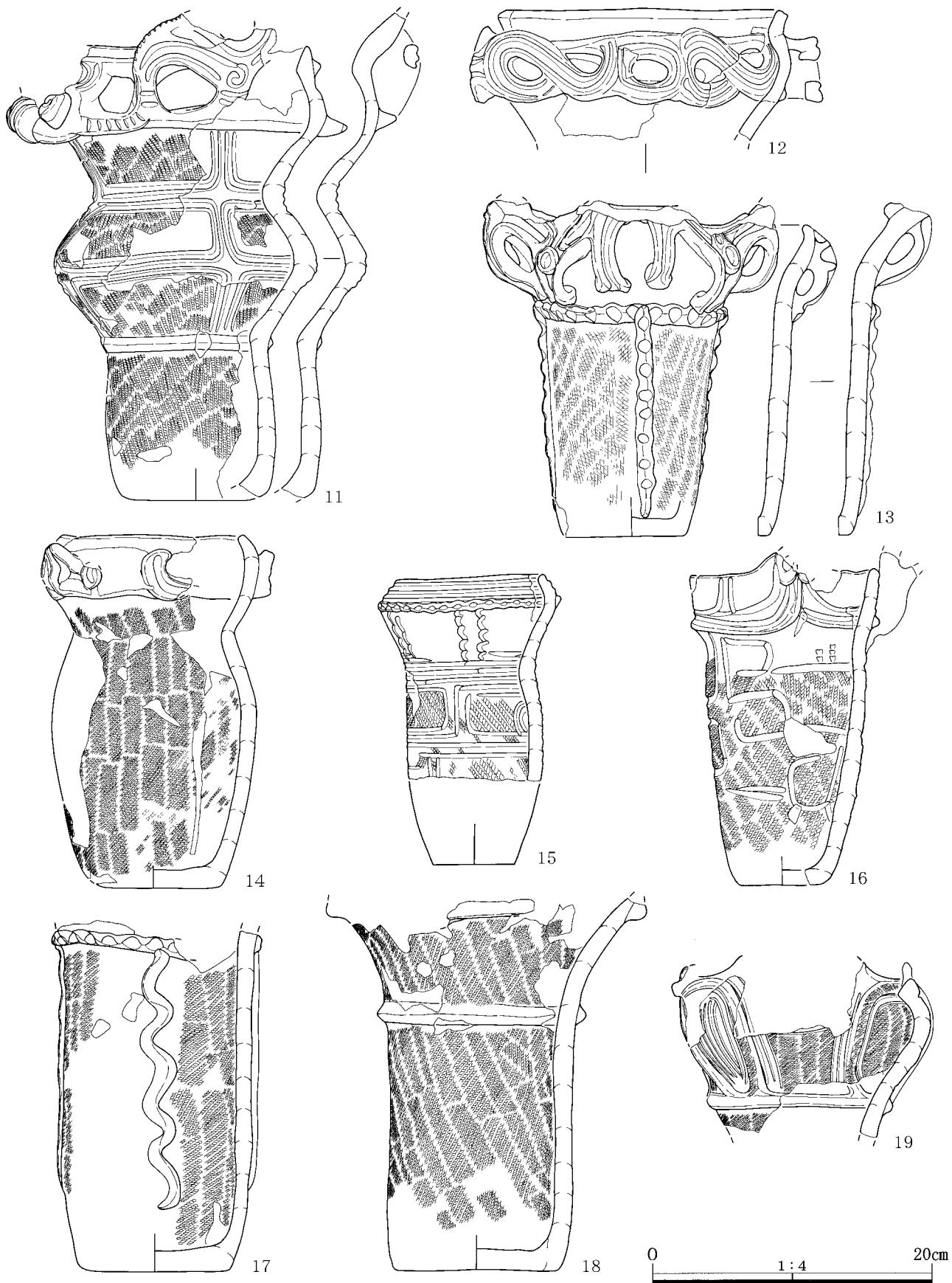


図5 上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器(4)

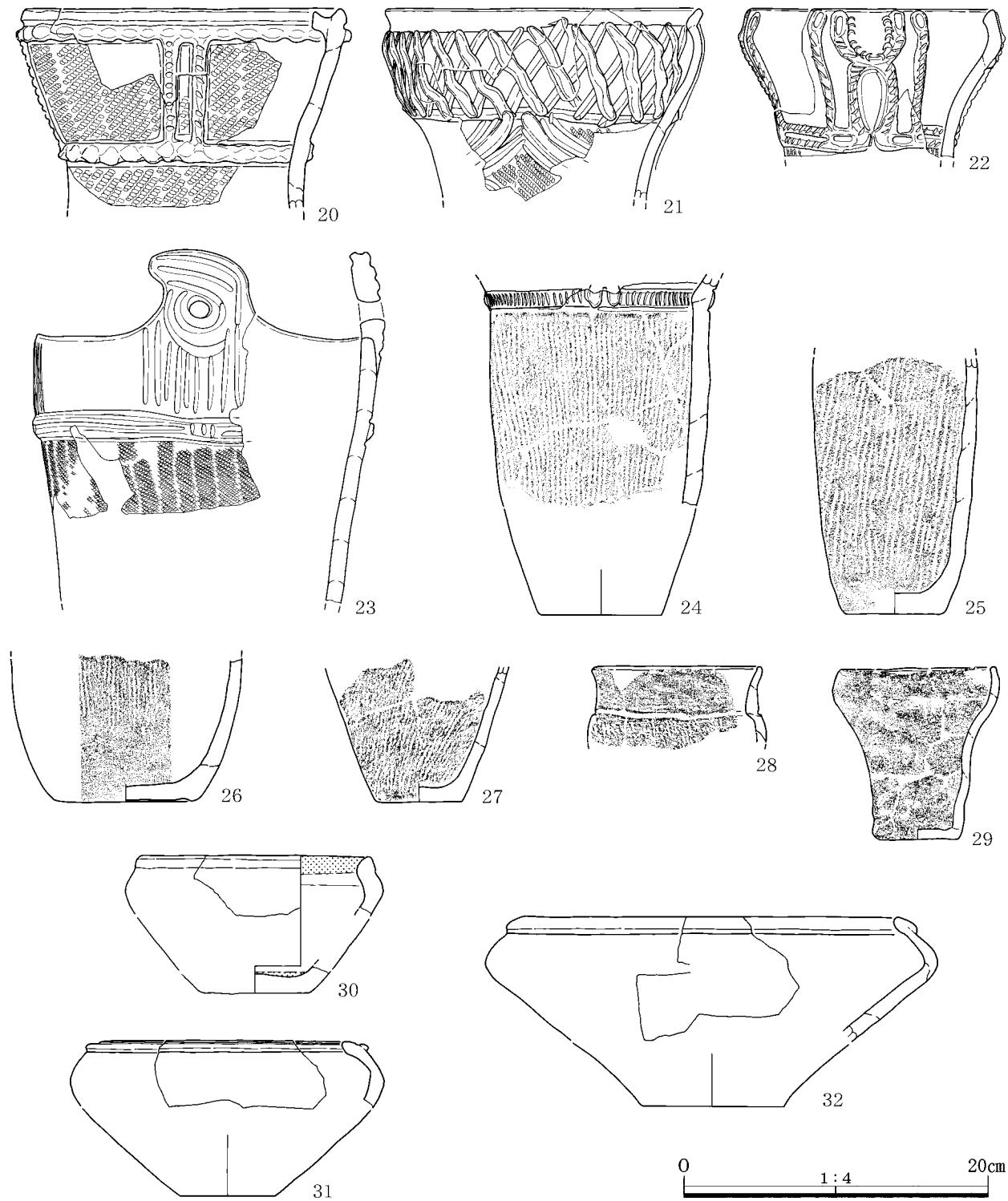


図6 上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器(5)

覆う。

**出土土器15** (報告書番号15)：口縁部1/4・底部欠損。口縁部には横位沈線が3条巡り、口頸部屈曲に鎖状隆帶を付す。頸部には2条一組の縦位波状沈線が施され、体部は3・4条の横位沈線群で画される。体部は沈線によ

る方形区画文が配され、区画内は沈線による渦巻文や縦位波状沈線が充てられる。地文は横位RL。

**出土土器16** (報告書番号16)：口縁部波状突起の一部を欠損。正副2突起を付す平縁深鉢。波状突起には環状突起を付し、隆線が垂下し頸部隆線と連接する。一方の突

起は橋状のM字状把手である。口縁部文様帶内は幅広沈線によるU字状意匠が連続する。体部は上半に横位沈線が施されるものの、強い分帶・区画、懸垂意識はなく、幅広沈線による方形意匠が縦位に配される。地文縄文は縦位RL。連続刺突文も施される。

**出土土器17**（報告書番号32）：体部～底部のみ残存。直立気味の体部形態を呈す。押圧を加えた鎖状の頸部隆線以下、隆線による縦位波状懸垂文が配される。四単位を数える。縄文は縦位RL。

**出土土器18**（報告書番号30）：頸部～体部約2/3残存。頸部は強く開き、体部は直立気味の形態を呈す。頸部と体部上半に横位隆線が巡る。体部は斜位RLが覆う。

**出土土器19**（報告書番号27）：波状口縁波頂部欠損。口縁部のみ残存。口縁部の内湾著しく強く、口縁部文様帶は頸部隆帶で画される。口縁部は隆帶による縦位楕円状・不整円状区画が波底部に配される。区画単位内は沈線充填と縄文施文区画に分けられ、2（A+A'）という構成を示す。区画隆帶には縄文が施文され、平行沈線を側線とする。

**出土土器20**（報告書番号25）：口縁～頸部約1/3残存。直線的な口縁部～体部形態。おそらく平縁であろう。口縁部下と頸部に押圧を加えた鎖状隆帶が巡る。口縁部文様帶は2条の刻み隆帶が垂下する。おそらく四単位であろう。地文は縦位RLを施す。

**出土土器21**（報告書番号26）：口縁～体部上半約1/4残存。口唇部の残存は極めて悪く、口縁部形状は不明である。口縁部内湾するキャリパー状深鉢。口縁部文様帶は頸部隆線で画され、隆線貼付による斜格子文が覆う。体部は頸部隆線より懸架した弧状隆線の連続か。隆線側線は一本描き沈線を2・3条施す。縄文は横位RL充填施文。信州系の土器であろうか。口縁部斜格子隆線と体部連弧文という文様構成は、管見に触れておらず、問題点の多い土器である。

**出土土器22**（報告書番号14）：平縁で内湾する口縁部を呈す。刻みを付す頸部隆線で画された口縁部文様帶。隆線によるU・逆U字状意匠が縦位連接する意匠を配す。U字状意匠内は刺突文を側線とするが、図反対面は沈線を側線とする。頸部隆線は2条からなり、小区画状の連鎖を見せる。体部は遺存が悪く、判然としないが縦位撲糸文Lが施されるようだ。

**出土土器23**（報告書番号34）：勝坂3式であろう。口縁部～体部上半約1/2残存。頸部隆線で画された口縁部文様帶。口縁部には円孔を中位に設ける板状突起を付す。おそらく一単位であろう。円孔周縁は弧状沈線が施され、下位は縦位沈線群が垂下する。体部縄文は縦位LRである。やや砂質で搬入品の可能性が高い。

**出土土器24～28**（報告書番号21～24）：体部に縦位撲糸文を施す個体である。28のみが撲糸Rを施文する。24は

刻みを施す横位隆線が付せられ、25は細身の長胴形の体部形態である。26は幅広の体部下半。28は横位沈線下に撲糸施文される小型の深鉢。27は開き気味の体部形態を呈す。おそらく勝坂3式～「勝坂系」であろう。

**出土土器29～32**（報告書番号17～20）：29は小型の無文深鉢。体部に指頭圧痕であろうか凹凸が顕著である。30は赤彩が口唇部内面と内底面に残存する。31は口唇部に浅い沈線が巡る。32は口唇部が肥厚し、口縁部は強い湾曲を呈す。

以上のように、上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器を概観した。「焼町類型」、「勝坂系」、「三原田類型」など群馬県における加曾利E I式古段階に比定される土器群が充実する<sup>4)</sup>。この他に、破片資料などが60点以上掲載されており、時間と紙数の都合もあり、全てを網羅できないのは残念である。改めて、19年度調査分の整理・報告作業の際に、他の遺構出土土器も含めて再吟味が必要であろう。

## 2. 出土状態の確認

31号住居跡は重複もなく、単独の検出である。出土遺物は、他の時期の混在は無く、極めて良好な出土状態といえよう。ただし、殆どの土器が床面から若干浮いた状態で出土したと観察表に記載されており、厳密な床直出土遺物は存在しないようだ。残念ながら、報告書掲載の遺物出土状態図からは、傾斜地における出土傾向を読み取ることは困難であり<sup>5)</sup>、確かに、本住居跡出土土器の同時性が保証されるのかは、確定性に乏しい。

しかしながら、平面図をみると、遺物の分布は住居跡北半に集中し、南側はやや散漫な分布状況を示している。また、個体が断面図示されたエレベーション図でも、個体の傾きや個体間のレベル差は北側から南側への流入が判断できる。さらに、写真1・2を参考にすると、北壁から住居跡中央にかけて、遺物の流入状態が把握され、幾つかの個体は、傾斜に沿った傾きをもって住居跡埋土下位より出土している。また本稿では図示できなかったが、報告書遺物分布図では、1の「焼町類型」や9の「勝坂系」の大型深鉢の破片接合状態は北側から南側にかけて散布しており、流入の際の破片散布が想起されよう。

このことから、31号住居跡北側から南側斜面にあたる住居跡内部に廃棄行為が存在したと考えられよう。おそらく、住居跡埋没過程のある段階における短時間の廃棄行為と捉えられ、住居跡土層観察で得られた2層（黒褐色土）中に廃棄行為が集中したと思われる<sup>6)</sup>。

重複もない単独の住居跡であり、出土する多量の土器にも大きな時間差は認められない。出土状態の観察からも、北側から南側への傾斜地形に沿った廃棄行為が想起される。このことから、31号住居跡出土土器群は、ある

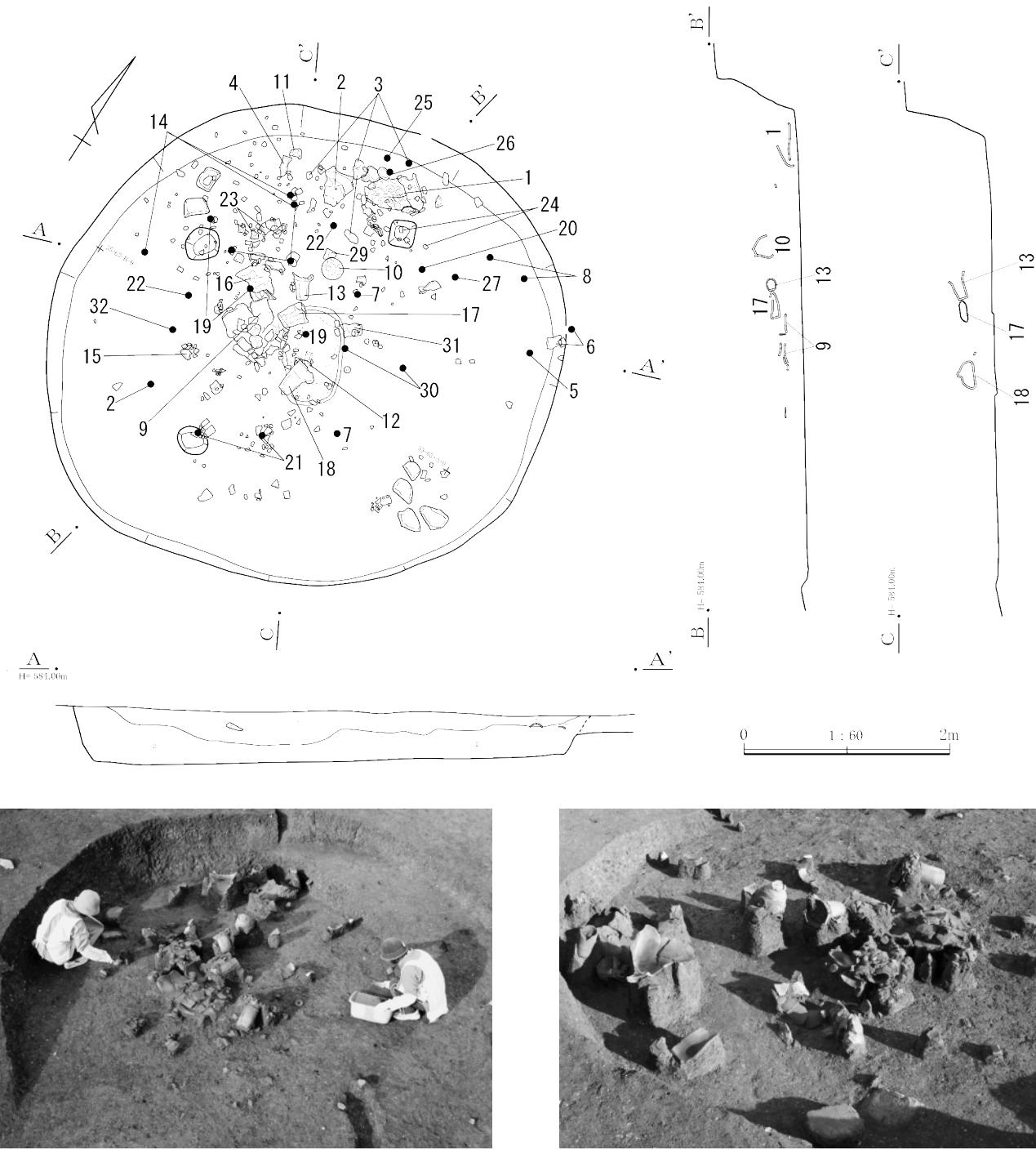


図7 31号住遺物出土状況

程度の時間幅は想定されるが、一括廃棄による所産と捉え、出土土器群の同時性を確定しておきたい。

このように、上ノ平31号住居跡出土土器群は、中期中葉末の加曽利E I式古段階に相当する、良好な土器組成を提示する。また特筆すべきは、群馬県内の該期土器組成中、極めて貴重な住居跡出土土器という一括組成条件を備えることである。群馬県内の該期土器資料は土坑出土例が比較的多く、数個体の共伴例を分析対象としてい

た。本例のように、30個体を超える共伴例を示す一括資料は、今後、中期土器研究の基礎資料となり得よう。

### 3. 類例の検討

ここでは、上ノ平遺跡31号住居跡出土土器群の類例を見てみよう。土器資料個々の類例は県内でも多数見ることができ、それらを枚挙することにより、本住居跡出土土器の詳細な位置付けも可能だが、これもかなりの時間

数と労力を要する。ここでは、周辺地域の資料から該期出土土器の組成を見る上で、遺構共伴例をあたってみよう。まず、住居跡出土という事例に合わせ、浅間山周辺の住居跡出土資料を見てみよう。この地域は該期土器資料が充実し、特徴的な住居跡土器組成を見ることができるが、今回は恣意的に「焼町類型」と波状口縁深鉢、台付き深鉢といった特徴的な類型や器種を含む組成を選んだ。

〈川原田遺跡J-5住〉(図8)：川原田遺跡(堤他1997)は長野県御代田町に所在する遺跡である。「焼町類型」の良好な出土が知られる。住居跡出土土器の組成も「焼町類型」を主体とした例が多い<sup>7)</sup>。

J-5号住では、「焼町類型」4個体(1~4)、勝坂式3個体(5~7)、縄文施文のみの個体(8)などからなる。「焼町類型」の口縁部突起に注意をすると、1・2は大型の環状突起が突出する。大型環状突起は「焼町類型」装飾の大きな特徴の一つで、口縁部上に設けられた眼鏡状突起が環状突起へと変化する様相が指摘されている(長谷川2001など)。1は、環状突起下にさらに環状突起を設けている。2の環状突起下端には双環状突起が連

接するように設けられている。3は小波状突起なのか欠損のため、判然としない。4も波頂部を欠するが、直下に双環状突起が縦位に連接する。また、1・2ともに環状突起内面も環状意匠が配され、環状あるいは双環状突起の組合せによる装飾が「焼町類型」口縁部突起の特徴となっている。勝坂式の大型深鉢(5)の体部は隆帯による方形状区画構成で、区画そのものはしっかりとした構成方法を示す。6・7も勝坂式であるが、6は円形区画文、7は体部に三角形区画文が配されている。

〈新堀東源ヶ原遺跡164号住居跡〉(図9)：新堀東源ヶ原遺跡(大賀他1997)は安中市(松井田町)に所在する。中期環状集落が検出されたように、大規模な集落遺跡である<sup>8)</sup>。

164号住居跡は軸長3.4m程の方形を呈する小型の住居跡で幾つかの土坑が重複する。土坑との新旧関係が不明のため、出土遺物の一括性はやや薄れるものの、報告書の記述に従うならば、24点の土器資料が提示されている。ここでは、完形資料を中心に14点を選んで掲載した。1は、波状口縁を呈する深鉢。口縁部文様帶の構成方法など「焼町類型」に近い文様要素を示すが、体部の大型三

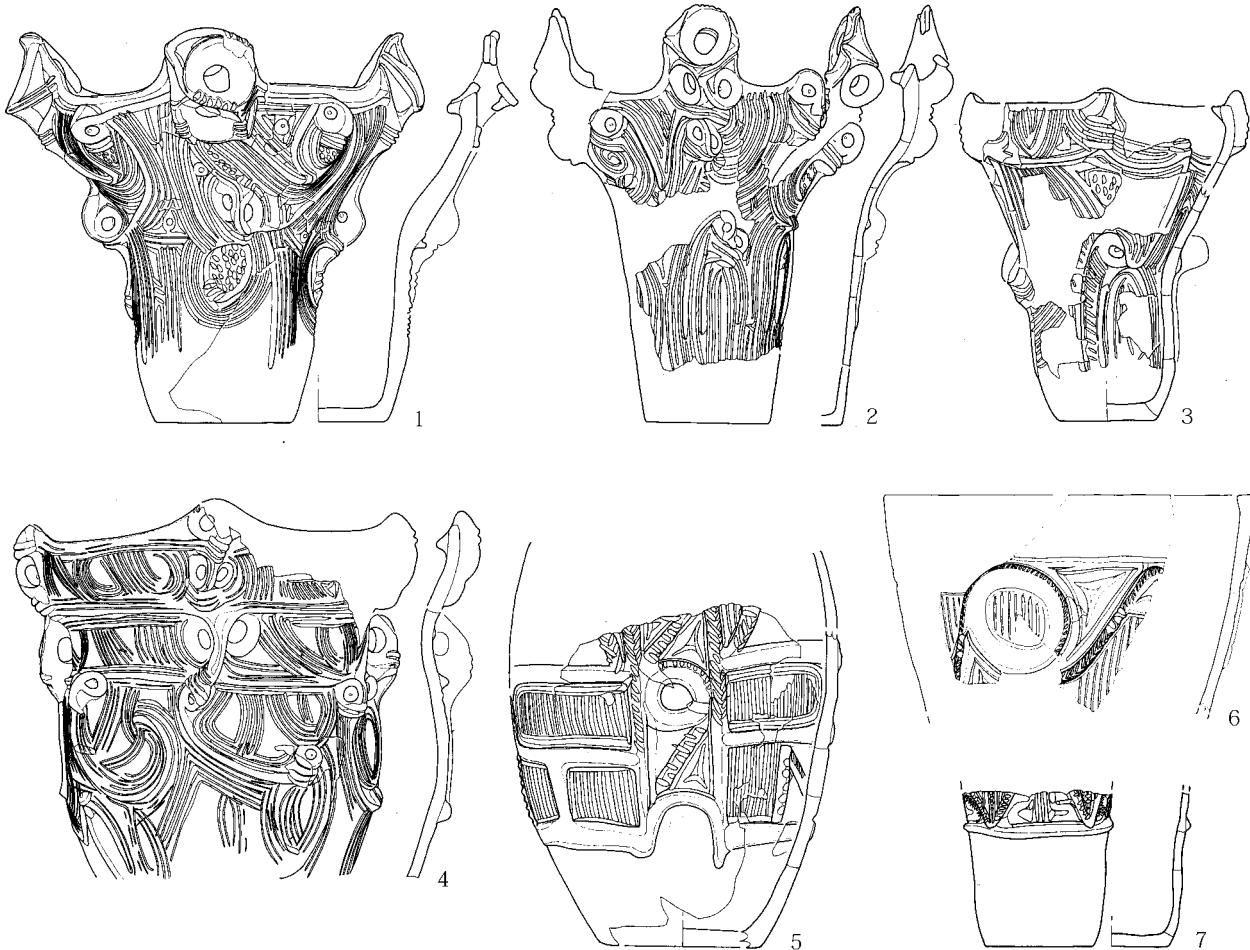


図8 川原田遺跡J-5号住出土土器



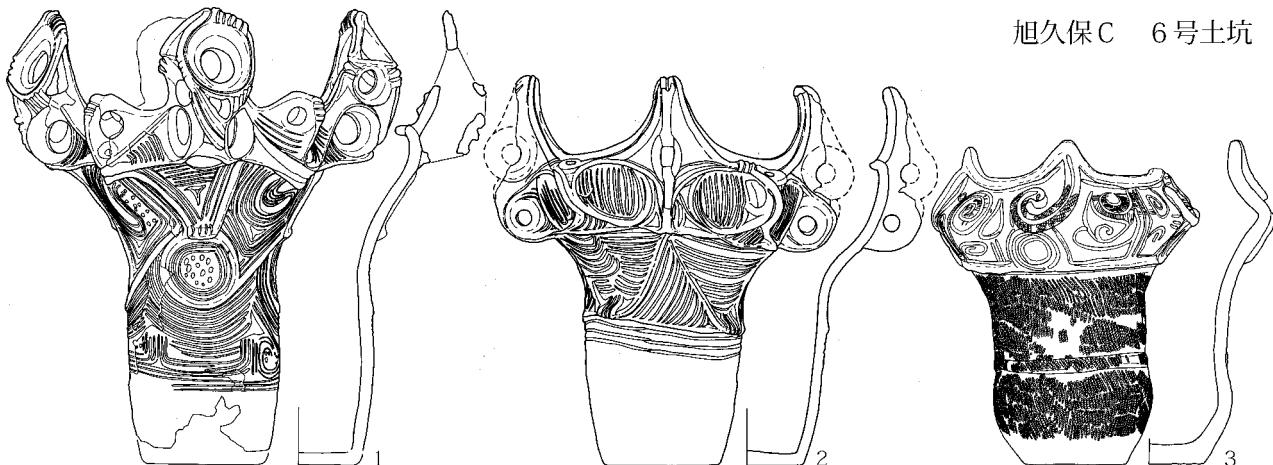
図9 新堀東源ヶ原164号住居跡出土土器

角区画文配列は勝坂3式の特徴を保有する。2～5も勝坂3式であろう。2は屈折底を呈し、多段の横帶文構成である。3は、特殊な突起と器形を呈するが、体部文様構成は幅広の区画文構成や蓮華状連続刺突文などから勝坂3式と判断できよう。4は台付き深鉢である。口縁部双環状突起以下、矢羽状の刻みを付す隆線によって画された体部文様帯は円環状意匠を中核にして弧状隆線が派生する。5は口頸部に縄文施文し、体部垂下隆線間を沈線による小区画文が埋める。截痕列からやや古相を呈すが、3式の範疇にしたい。6～9は縄文施文する一群である。7はやや新相を呈する加曾利E I式古段階の資料

であろうか。出土位置も土坑重複部のため、確定的な共伴ではないかも知れない。12～14は破片資料のため詳細は避けるが、12は「焼町類型」の口縁部破片であろう。13・14も特徴的な破片であり、加曾利E I式古段階の様相を示す。

川原田遺跡・新堀東源ヶ原遺跡とも浅間山周辺に位置する遺跡であり、立地上は本遺跡と近縁性が認められる。土器様相は近似するのだが、例えば、新堀東源ヶ原遺跡では、「焼町類型」の良好な遺構出土が見られず、また川原田遺跡では、加曾利E I式古段階の縄文施文をする一群は、時期的な要因もあるのか、客体的な存在である。

旭久保C 6号土坑



道訓前II JP-9 墓

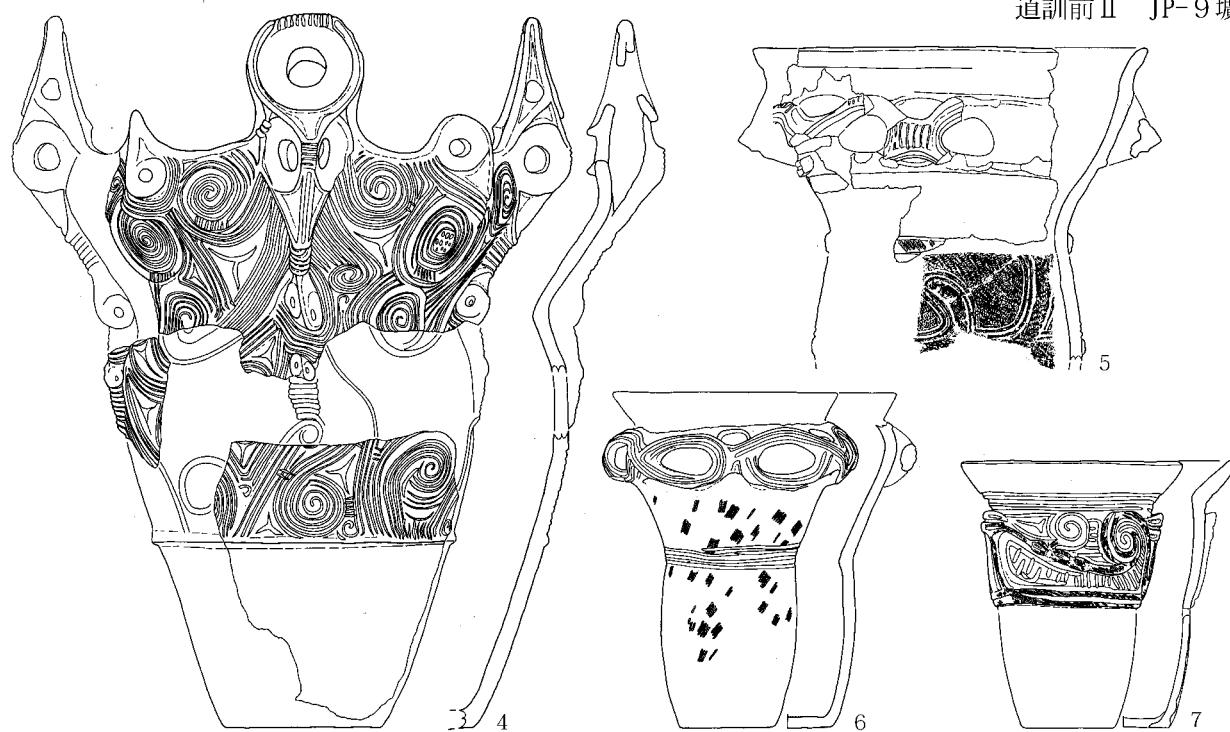


図10 旭久保C遺跡6号土坑（上）・道訓前II JP-9号土壙

土器群の組成を見ても、若干の地域差あるいは時期差が認められよう。しかしながら、川原田遺跡では「焼町類型」と勝坂3式の共伴例を確認できたと同時に、口縁部突起の傾向を観察した。新堀東源ヶ原遺跡では、典型的な「焼町類型」の共伴は見られないが、波状口縁を呈する深鉢や台付き深鉢という特徴的な器種が組成に加わる様相を見ることができた。

次に、上ノ平I遺跡31号住居跡と同様な段階で、近似する土器組成と捉えられる渋川市（北橋村）道訓前遺跡（長谷川1999）と富士見村旭久保遺跡出土土器（長谷川2001）を類例として考えてみたい。両遺跡とも、上ノ平

I遺跡より距離を置く、赤城山西南～南麓域の遺跡ではあるが、加曾利E I式古段階の資料が良好に出土した遺跡として知られる。また、住居跡出土資料ではなく、土坑出土資料であるため、あるいは上ノ平I 31号住居跡出土土器の組成とは、時間幅などに差が見られるかもしれない。ご容赦願いたい。

旭久保遺跡6号土坑：3点の深鉢が共伴する土坑出土資料である<sup>9)</sup>。1は「焼町類型」で大型の口縁部環状突起を突出する。環状突起下には双環状突起が付され、川原田J-5住2と同様な構成方法を示す。また体部文様帶は一帯構成で中位に設けられた円形区画文を中核に斜

位・弧状隆線が派生する文様構成である。連接する口縁部突起や体部円形区画の在り方など上ノ平I遺跡31号住居跡1との共通性が強いものの、口縁部文様帯を持つこと、体部下半に沈線とはいえ、横位区画線を設けることなど、文様構成上も差異を見いだすことができよう。2は波状口縁深鉢。「焼町類型」とは大きな文様構成差が認められるが、沈線施文方法や環状突起の在り方などから、「焼町類型」との関係性を想起する個体である。口縁部文様帯は楕円状区画文、体部文様帯に大型三角形区画文が配される文様構成は、上ノ平I31号住居跡2と極めて近い文様構成である。ただ、上ノ平I例は下半に楕円状区画が配され、旭久保2は波頂下に環状突起が連接される差があるのは留意しておきたい。旭久保3は勝坂3式と判断したが、口縁部文様帯に装飾を集中させる傾向は、3式終末あるいは「勝坂系」に近い存在かも知れない。

〈道訓前II遺跡JP-9土壤〉：4点を掲載する。大型の土壤で、出土した土器資料の一括性は高い評価が与えられる。1は大型の「焼町類型」。環状突起が突出し、下端に双環状突起が連接する形態である。体部文様帯は下半に区画線を設けるが、口縁部から一体化した文様帯で覆われている。文様要素は渦巻文を主体としており、上ノ平I31号住居跡1と類似した様相を示す。ただし、大きな差異としては、31号住居跡1は体部下半で垂下隆線及び沈線が開放しており、懸垂文構成を呈している。2は、「勝坂系」と考えている。体部上半に文様帯を集め、隆線と沈線による渦巻文を配している。3・4は「三原田類型」である。加曾利E I式古段階に比定され、赤城山南麓域を分布の中心にしている。中空状の突起が口頸部に配され、体部は縄文を地文とする特徴を見せる。上ノ平I31号住居跡12の口頸部に配された横位S字状隆線を配す例も「三原田類型」といえよう。JP-9土壤ではこの他に、特徴的な浅鉢なども出土しており、該期の土器組成を考える上で重要な位置付けとなっている。

以上、上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器の類例をあたった。浅間山周辺からは、川原田遺跡と新堀東源ヶ原遺跡の住居跡資料から、共伴資料の傾向(勝坂3式と「焼町類型」)や器種組成の傾向(波状口縁深鉢と台付き深鉢)を捉えた。また、赤城山南麓域を中心に旭久保遺跡と道訓前遺跡の土坑資料を概観し、31号住居跡出土土器との共通性や差異を考えて見た。

次に、類例資料から得た幾つかの共通点や問題点を踏まえて、31号住居跡出土土器群の位置付けを考えて見たい。

#### 4-1. 「焼町類型」について

筆者の恣意的な選択により、類例資料の多くは「焼町類型」が共伴する遺構を抽出したのであるが、上ノ平I

遺跡1の「焼町類型」も出土土器群の中で、際立っており、注意を払わなければならない土器である。本稿では、遺構出土で複数の土器群と共に伴する例を類例資料として挙げたため、比較資料としては4個体となるが、若干ながら、上ノ平I遺跡31号住居跡1との比較を試みてみよう。

先にも述べたが、「焼町類型」の特徴的な文様要素としては口縁部環状突起がある。勝坂3式や加曾利E I式古段階の土器群と共に伴する「焼町類型」は環状突起が突出する特徴を見せる。「焼町類型」の突起に関しては、既に長谷川福次氏により詳細にその変化が述べられており

(長谷川2001)、ここでは詳細を省くが、今回類例で挙げた「焼町類型」口縁部突起を図11に集めた。2~4は大型環状突起を突出させ、下端に双環状突起を付す構成である。1の環状突起と下端突起に注意すると、両突起を併せた形態は双環状突起を縦位に付した形態に近く、それまで「正位」に付せられていた双環状突起が縦位に付せられた状態と見ることができる。また、「焼町類型」の口縁部大型環状突起は内面にも環状意匠を充てる例が多く、このことからも、単独の環状突起ではなく、あくまでも双環状突起の形態を基本にした口縁部突起装飾と判断できよう。また、1・3・4には斜位小型双環状突起が大型突起下に付けられており、これも重要な文様要素の一つと考えられている。このようにみると、上ノ平I遺跡31号住居跡1の「焼町類型」は、突起そのものがかなり退化した印象がある。双環状突起が斜位に付せられ、下端に付せられる突起も斜位に移動している。「焼町類型」内部で、大型環状突起に対する意識が変化したのだろうか。

次に、31号住居跡1の体部文様構成を類例資料から見ると、道訓前II JP-9土壤1が体部一帯構成をとり、曲隆線による渦巻文の在り方や波頂下の主幹線の連接など類似要素が多い。文様構成上は先にも述べたように、体部下半の横位区画線の有無に大きな差があるが、その他の体部文様要素は両者の時間的な僅差を想起させよう。

本稿の類例資料には掲載されなかったが、「焼町類型」には、体部に大型橋状把手が付される例がある。31号住居跡1には、三連の橋状把手が四単位設けられている。口縁部突起と一体化した橋状把手は、懸垂文構成をより際立たせる効果にもなっており、文様の一部となっている。「焼町類型」に橋状把手が付せられる例としては、渋川市行幸田山遺跡A区1号土坑(大塚1987)、道訓前JP-14土壤に出土例がある。両者とも口縁部突起下に設けられ、口縁~体部文様の基軸ともなっている。

このように、31号住居跡1の「焼町類型」は多くの類例があり、その中でも安定的な様相を示している。口縁部突起が小型化する変化は見られるが、典型的な「焼町類型」とみることができよう。おそらく、「焼町類型」の

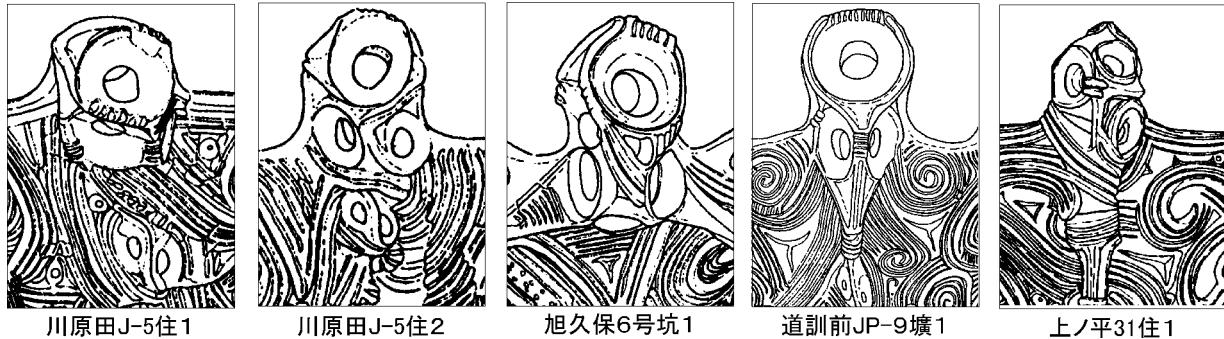


図11 「焼町類型」口縁部環状突起諸例

後半段階の所産とみることができよう。

さらに31号住居跡は「焼町類型」に共伴する個体数が、これまでの群馬県内の該期遺構出土例からみると、量的な充実を見る。長野県川原田遺跡の諸例には及ばないが、浅間山周辺という本遺跡の地理的条件を勘案すると、「焼町類型」を扱う集団・集落が濃密に分布していた証左と考えたい。後述するが、幸神2号住居跡にみる、炉体土器に「焼町類型」が使用されていた事象を併せて考えてみたい。上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器群は、「焼町類型」が日常居住の痕跡として見ることができた住居跡出土土器群なのである。

#### 4-2. 波状口縁深鉢について

31号住居跡出土土器2の類例として、旭久保6号土坑2を挙げた。両者とも、口縁部は楕円状区画文、体部は三角形区画文を配し、区画内を沈線が充填する共通性がある。特に、区画内沈線充填手法は、「焼町類型」後半段階の体部文様にも見られる手法であり、筆者も、旭久保6号土坑2を「焼町類型」の変化と思考した経緯がある。しかしながら、今回31号住居跡2が旭久保6号土坑と同様に「焼町類型」と共伴した事例を踏まえると、31号住居跡1や旭久保6号土坑1に見る「焼町類型」は安定した文様構成であり、共伴する波状口縁深鉢2個体を「焼町類型」の変形形とすると、「安定形」と「変形形」の共伴様相が一定化しており、「変形形」としての多様性を失うことになる。さらに検討を要しよう。

31号住居跡出土土器3も波状口縁深鉢である。報告書図では波底部を正面としているが、ここでは、波頂部を正面とし、可能な限り文様を復元した。31号住居跡2に比して波状形態は緩やかな波状を描くようだ。ただ、文様構成上は、31号住居跡2とほぼ同様で、口縁部文様帶楕円状区画、体部方形状区画、体部下半は楕円状の区画が配された様相は、極めて近い様相であり、同種の土器群とも判断できよう。5の充填文様は短沈線を主体とするが、沈線充填手法として包括でき、体部の方形区画間に刺突文充填手法を施した区画文を配する。これは「焼町類型」と近い文様要素とも捉えられるが、この充填手

法のみで、「焼町類型」と判断できないだろう。

31号住居跡2及び3は、口縁部楕円区画と体部三角形区画・下半の楕円状区画は比較的単純な文様構成であり、特に区画内沈線充填手法や刺突文充填手法は該期の文様要素として、様々な土器群に採用される手法である。31号住居跡1にみる典型的な「焼町類型」の文様構成とは、大きな差があるのは否めないだろう。言い換えれば、異系統土器群が共存するこの時期にあって、単純な文様構成と充填手法を呈する土器群の位置付けは、周辺の土器群の文様構成や文様要素を受容しやすい土器群と見ることができよう。このことからも、31号住居跡2や3を「焼町類型」と判断するには、慎重な判断が必要と考える。筆者自身は、加曾利E I式古段階における「焼町類型」のある種の方向性から、波状口縁に文様施文手法を転写した現象と考えている。

新堀東源ヶ原遺跡164号住居跡1も波状口縁深鉢である。31号住居跡2や3の類例としては不適当な文様構成であるが、勝坂3式や勝坂系に近い土器と考えた。ただし、波頂部下の双環状突起と隆線による半渦巻き状意匠は「焼町類型」に共通する文様要素であり、相互の関係性を窺わせる資料である。

このように、波状口縁深鉢の類例を見るに、施文手法や文様要素から、31号住居跡2・3あるいは旭久保例や新堀東源ヶ原例を「焼町類型」と判断するのは、避けるべきかもしれない。安定した文様構成を示す「焼町類型」が存在し、一部の手法が波状口縁深鉢に模倣あるいは転写した結果とみておきたい。ただ、この波状口縁深鉢の母体ともなるべき土器群に関しては、寺内氏の論考（寺内2003）を踏まえ、長野県域や群馬県西部・北西部の該期波状口縁深鉢を精査しなければならないだろう。

#### 4-3. 台付き深鉢について

上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器群で特徴的な器種として、図4-10の台付き深鉢がある。台付き深鉢は、深鉢や浅鉢という中期主要器種の中にあって、出土量も少なく主体的な器種ではないが、住居跡出土土器群の組成に加わる例もある。台部には透かし孔が設けられること

が多いことから、特殊な儀礼用の用途も想起されよう。本例を「勝坂系」と判断したが、双環状突起を付す例は、新堀東源ヶ原164号住居跡4に類似する。164号住居跡の器種組成をみると、勝坂式の深鉢を主体に、波状口縁深鉢（1）や特殊な鉢（3）、台付き深鉢（4）が共伴する様相である。勝坂3式、あるいは勝坂系を主体とした、比較的単純な土器群の組成と見ることができる。一方、上ノ平I遺跡31号住居跡は系統差を持った深鉢が多数共伴し、波状口縁深鉢や浅鉢、台付き深鉢が加わる組成である。両者の時期差及び地域差を考慮すべきではあるが、波状口縁深鉢に加え、台付き深鉢が組成に加わる様相は、注意しておきたい器種組成である。

新堀東源ヶ原164号住居跡4および上ノ平I31号住居跡10ともに勝坂3式・勝坂系である。双環状突起を口縁部下に付し、正面觀を強調している。また、体部下半に区画隆帯を設け、体部文様帯を一帯構成にしている。隆帯による環状意匠・半渦巻き状意匠を主幹文様とし、沈線と三叉文・刺突文などによる充填文様を施す。特に31号住居跡10は半肉彫手法に近く、共伴する他の土器文様施文手法とは差が見られる。この傾向は新堀東源ヶ原164号住居跡4にも認められ、勝坂式相互の共伴内で台付き深鉢に施文手法の差を認めることができよう。また、共伴する他の土器群に比して、矢羽状の刻みなどはやや古相を示す文様である。あるいは、台付き深鉢は、共伴する土器群と比して、異系統あるいは古相の土器文様を充てる傾向を想定できよう。今後、台付き深鉢の文様変化や土器組成内の在り方など検討課題となる。

これまで、筆者は土器群の組成として、型式・類型の組合せによる地域差や時期差、さらには個体間の相互影響を考えてきたが、上ノ平I31号住居跡や新堀東源ヶ原遺跡164号住居跡のように特定器種が組成に加わる現象も重視しなければならないだろう。中期土器には後期のそれのように器種文様は該当しない傾向にあるが、出土土器の組合せを考える際には、器種・器形も留意しなければならないだろう。その際、器種組成としての位置付けと文様組成としての組合せなのか、非常に難しい判断が伴う。ただ、器種も型式も混在した、組成判断は避けるべきではある。器種は器種組成から、文様は型式組成を踏まえて判断していきたい。

このように、上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器は、個々のレベルでも、様々な問題を提起する。今回は「焼町類型」・波状口縁深鉢・台付き深鉢と3つの視点で位置付けを試みたが、他に縄文施文する特徴的な一群、例えば「三原田類型」・「勝坂系」など他の土器群に対しては、分析が及ばなかった。稿を改めて様相把握を果たしたい。

## まとめ

本稿は本来ならば、上ノ平I遺跡の報告書まとめに掲載すべきものであるが、事業団紀要の紙面を借りて、長々と土器の説明を加えて恐縮の至りである。また、31号住居跡出土土器に注目し、その資料価値を高めるべく、各個体に注目し、類例をあたったのであるが、筆者自身の分析不足もあり、当を得る分析には至らなかった。特に、縄文施文する一群に対しては分析不足である。加曾利E1式土器の波及と大木8b式の影響さらに「勝坂系」などの土器群が介在しつつこれらの土器群を存在させていく。加えて、阿玉台III式・IV式の存在も無視できないだろう。

その中で、31号住居跡出土土器群は住居跡出土は住居跡出土現象を踏まえ、周辺遺跡の住居跡出土土器類例を探ってみた。これまで、県内の該期土器組成で住居跡出土土器群で構成された例としては、富士見村見眼遺跡1号住居跡、向吹張遺跡J-8A号住居跡、渋川市（北橋村）六反田1号住居跡などが挙げられるが、その他の良好な出土土器組成を見せる例は、土坑出土に集中しており、住居跡より他の土器群と共に伴する例は極めて少なかった。一方、長野県域の「焼町類型」は住居跡出土土器群の中核を占める形で組成の中に加わる様相を示している。筆者もこれまで、群馬県と長野県の「焼町類型」を比較検討する際に、住居跡出土の「焼町類型」と土坑出土の「焼町類型」を同等のレベルで研究対象にしてよいのか、若干不安に感じていた。土坑出土による埋置状態と住居跡出土による廃棄状態の差は、時期・段階的な差は元より、当時の埋置・廃棄意識の差を考慮しなければならないだろう。時間差を語るだけの遺構出土ではなく、「なぜ、その遺構から、その状態で出土したのか」を踏まえて、遺構種別による、共伴土器資料の在り方も今後の検討課題としたい。

ともあれ、群馬県域で「焼町類型」を含む住居跡出土資料が出土した例は、土器相互の比較分析上にも有効といえよう。居住痕跡のある遺構-住居跡から、「焼町類型」が出土した例は先に挙げた、見眼遺跡などがあるが、本遺跡周辺では、長野原町幸神遺跡2号住居跡より、「焼町類型」が炉体土器として検出されている（中沢他2008）。共伴資料に恵まれていないが、当地域が、「焼町類型」を主体的に含む土器文化圏内として位置付けられたのは、意義深いことである。川原田遺跡にみる土器組成と同様な土器組成が吾妻川流域にも存在し得る蓋然性を示唆したといえよう。

さて、31号住居跡出土土器群の時間的な位置付けであるが、類例資料からは、「焼町類型」の様相と「三原田類型」・「勝坂系」の共伴を重視すれば、道訓前JP-9土壙出土土器が、同時期の土器組成と考えられよう。また、旭久保6号土坑出土土器も、波状口縁深鉢の文様構成の

類似性及び「焼町類型」と勝坂3式の存在から、31号住居跡出土土器と相前後する段階と見て良いだろう。同様に住居跡出土組成で見た川原田遺跡J-5号住居跡5は勝坂式体部文様が安定した区画文構成を示す。31号住居跡30の大型深鉢体部文様はやや崩れた様相を示しているため、J-5号住居跡は若干先行する様相を示す。これは「焼町類型」環状突起の様子からも看取できよう。最後に新堀東源ヶ原遺跡164号住居跡ではあるが、加曾利E I式古段階の土器が幾つか見られるが、共伴する勝坂式は3式を主体としており、31号住居跡よりは先行すると考えたい。本稿では、新堀東源ヶ原164号住居跡出土土器群は、波状口縁深鉢と台付き深鉢の共伴例として評価をしたい。

本稿では触れなかった土器の一つに31号住居跡21がある。この土器は、斜格子状の貼付文が特徴的である。一見、口縁部は長野県中・南部に分布する特徴的な土器群に類似するが、体部に連弧状の隆線が付され、縄文が施文される。この土器も特異な文様構成であり、問題点は多い<sup>10)</sup>。

上ノ平I遺跡31号住居跡の位置付けとして、「焼町類型」と波状口縁深鉢、台付き深鉢に注目し、類例や組成の中での在り方を探ってみた。分析は不十分であり、課題を残したままである。今回は、特徴的な類型群の共伴実態と、それとは別に特徴的な器種が加わる組成として、31号住居跡出土土器群を位置付けておきたい。

従来、加曾利E I式古段階の土器群は、個々の個体が独自性を持ち、類型群相互の関係が複雑な様相を示していることで知られる。31号住居跡出土土器もその渦中があり、極めて個性溢れる様相を呈す。それに加えて、台付き深鉢等を加えた特徴ある器種組成を示している。この両側面を備えた組成からなる上ノ平I遺跡出土土器の提示する問題は、さらに検討を加えなければならないだろう。再々検討が必要である。その際に、本稿で示した筆者の分析はともかく、図示し得た土器実測図は是非参考にしていただきたい。

以上、紙数の限りよりも、時間の制約が多く、検討不十分な分析になってしまった。31号住居跡出土土器にとっては、不名誉なことだろう。再度、分析・研究の機会を持ち、出土土器の資料価値を更に高めていきたい。

上ノ平I遺跡整理作業中にもかかわらず出土土器観察の機会を与えて頂いた報告書編集の瀧川伸男氏に深謝申し上げる。出土土器観察の際には、福田貫之氏と日沖剛史氏にも出土土器の位置付けなど、多くの意見や観察視点をご教示いただいた。特に日沖氏には再実測・トレースの際に、文様の復元やトレース線種など、氏のご意見

が大変参考になった。

また、本稿執筆の際、出土土器の観察に関しては事業団普及情報課のご配慮を賜った。上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器資料化にあたっては、八ッ場ダム調査事務所補助員の皆さんのご助力を得ている。その他に、下記の方々にお世話になった。記して感謝したい（敬称略・順不同）。

井草峯子・小川卓也・狩野君江・篠原信子・新保純子・鈴木徳雄・関智賀子・高橋清文・寺内隆夫・深井美紀・丸山里見・矢口裕之・割田博之

株式会社測研・有限会社毛野考古学研究所・八ッ場ダム調査事務所職員諸氏

### 註

- 1) 長野原町川原湯・川原畠地区の発掘調査は近年本格化したばかりで、今後、多くの新資料の検出が見込まれ、期待が高まる地域である。
- 2) 山口逸弘 2000 「勝坂系」という末裔たち—勝坂式以降における文様構成の伝統と収斂化—』『群馬考古学手帳』10群馬土器観会で筆者が位置付けた用語である。加曾利E I式段階における勝坂式の伝統を残した土器群を扱ったのであるが、系統なのか段階なのかの明確な解説も至らぬまま今日に至っている。土器型式の継続性、地域間の差異と変化など、この土器群に関わる課題は多く、再度検討しなければならない土器群である。
- 3) 山口逸弘 2001 「道訓前遺跡I出土の三原田型深鉢について」『道訓前遺跡』北橘村教育委員会を踏まえて、このタイプの土器群を「型式」としての位置付けを躊躇している次第である。「類型」として、研究の進展を図る方向を提起したい。
- 4) 「異系統の土器群の共存現象」（佐藤達夫 1974）として位置付けられよう。中期中葉末は、東日本各地で様々な類型群が共存した結果、加曾利E I式新段階・加曾利E II式へと収斂化が果たされる。上ノ平I遺跡31号住居跡出土土器群も、各個体が独自性を見せ、型式としての自立性を見出せない。類型群の共存と判断したい。
- 5) 報告書図では、断面遺物分布図が傾斜に沿っておらず、廃棄・流入方向の判断が困難である。傾斜地での調査では、床面から遺物までの距離よりも、床面で使用されていた土器なのか、廃棄・流入の所産なのかの図表現が優先されるべきである。本稿でも、詳細な断面分布図を提示できず、デジタルデータの断面図での掲載になった。ご寛容ねがいたい。
- 6) しかしながら、住居跡埋土・覆土中に別種の同色調を埋土とする土坑などが重複した場合、住居跡一括廃棄などの判断は困難である。その場合、調査時の観察・所見がより重要となろう。
- 7) 本稿で掲載した川原田J-5号住以外にJ-11号住・J-12号住などで、「焼町類型」を組成の中心におく住居跡出土土器群がある。
- 8) 新堀東源ヶ原遺跡以外には、下鎌田遺跡（下仁田町一現富岡市）、砂押遺跡（安中市）などで中期環状集落跡が検出されているように、中期集落跡が群在する地域である。これは、筆者らが調査する、吾妻川流域も同様な様相であり、拠点集落が近距離にある実態と背後を検討しなければならないだろう。
- 9) 旭久保遺跡は正式報告は未刊行ではあるが、6号土坑出土土器に関しては、長谷川氏により、道訓前遺跡報文中に関連資料の一つとして実測図が掲載されている。また、図示した3個体以外にも縄文施文キャリバー状深鉢が共伴する。
- 10) その他に図5・図6に示した縄文施文をする一群に関して、分析項目は実に多い。大木8b式の文様構成の波及や「勝坂系」の体部縄文施文の在り方など問題点を精查して改めて取り組んでみたい土器群である。

### 参考文献

- 赤山容造 1990 『三原田遺跡 第2巻』 群馬県企業局

- 大賀 健他 1997 『新堀東源ヶ原遺跡』松井田町遺跡調査会  
大塚昌彦他 1987 『行幸田山遺跡』渋川市教育委員会  
小林謙一 2004 「長野県群馬県にかけての地域の縄紋中期中葉土器の  
編年研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 国立歴史民俗博  
物館  
小林謙一 2004 「東信・北関東地方の縄紋中期中葉土器の生産と流通に  
ついての予察」同上  
佐藤達夫 1974 「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」『日本  
考古学の現状と課題』 吉川弘文館  
佐藤雅一 2005 「魚沼地方における道尻手遺跡出土土器の編年学的位  
置付け」『道尻手遺跡』新潟県中魚沼郡津南町教育委員会  
野村一寿 1984 「塩尻市焼町遺跡 1号住居址出土土器とその類例の位  
置付け」『中部高地の考古学』III 長野県考古学会  
瀧川仲男他 2008 『上ノ平 I 遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
寺内隆夫他 1986 『梨久保遺跡』長野県岡谷市教育委員会  
寺内隆夫 1992 「浅間山東側からの視線、西側からの視線—焼町土器の  
成立をどうとらえるか—」『長野県考古学会誌』67号  
寺内隆夫 1997 「川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について」『川  
原田遺跡』長野県御代田町教育委員会  
寺内隆夫 2003 「後田原遺跡第IV類土器の系譜—焼町土器成立期の1  
類型について—」『下総考古学』  
寺内隆夫 2004 「千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器—焼町土器、  
および北関東地域との関係を中心にして—」『国立歴史民俗博物館研究報  
告』第120集 国立歴史民俗博物館
- 中沢 悟他 2008 『山根III遺跡(2)・上原IV遺跡・幸神遺跡』(財)群馬県埋  
蔵文化財調査事業団  
堤 隆他 1997 『川原田遺跡』長野県御代田町教育委員会  
長谷川福次 1999 「道訓前遺跡II 遺構・遺物」『北橘村村内遺跡VII』  
北橘村教育委員会  
長谷川福次 2001 「道訓前遺跡の焼町土器」『道訓前遺跡』北橘村教育  
委員会  
羽鳥政彦 1986 『田中田・窪谷戸・見眼遺跡』富士見村教育委員会  
羽鳥政彦 1987 『向吹張・岩之下・田中・寄居遺跡』富士見村教育委員  
会  
土肥 孝・長谷川福次 2004 「道訓前遺跡の縄文式土器—縄文時代中  
期中葉から後半初頭に至る赤城山西～南西麓の土器様相—」『先史考古  
学研究』第9号  
松島榮治・福田貫之・山口逸弘 2005 「嬬恋村今井東平遺跡の紹介  
—1区縄文時代中期土器資料を主に—」『研究紀要』20 (財)群馬県埋蔵  
文化財調査事業団  
山口逸弘他 1989 『房谷戸遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
山口逸弘 1991 「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成」『土曜考古』  
16 土曜考古学研究会  
山口逸弘 1997 「川原田遺跡「新巻類型」と「焼町類型」—両類型を取  
り巻く型式組成から—」『川原田遺跡』長野県御代田町教育委員会  
山口逸弘 2004 「群馬県における「焼町類型」の位置—異系統土器共存  
の一観角—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 国立歴史民俗博  
物館